



東北の復興にリーダーの力を。

被災地で復興活動に取り組むリーダーを、短期・中期・長期の3つのフェーズで支援します



震災復興リーダー支援プロジェクト Disaster Recovery Leadership Development Project

Annual Report 2011-2012

(2011/3/11 - 2012/3/11)

<http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/>



本プロジェクトが目指すもの



5年後も10年後も若者たちが集い、 起業家精神あふれる東北へ

2011年3月11日、1000年に一度と言われる大震災が東北を襲いました。震災発生の日から、ETICは震災復興に向けた検討を開始。被災地・被災者への支援に向け、3月14日に「震災復興リーダー支援プロジェクト」を発足させました。

震災復興リーダー支援プロジェクトは、「5年後も10年後も若者たちが集い、起業家精神溢れる東北へ」を目標に掲げて活動しています。

東北の復興の推進に向けては、地域の人々の主体的なアクションが重要です。また、行政や企業の支援が届きにくい人々の、自律的で尊厳ある生活基盤も支えていかねばなりません。

しかし、多くの復興の現場で推進の課題となっているのは、「中核として動く担い手が足りない」ことです。

多くのリーダー達が復興活動に取り組み、有能なリーダーのもとには復興・創造に向けた様々な案件やアイデアが次々と寄せられています。しかし、東北地方の優秀な若者たちは首都圏に流出する傾向が強く、特にリーダーの右腕となる人材が圧倒的に不足しています。そのような状況に対して、我々はこのプロジェクトを通じて、東北の復興に若者が集まる流れを留めることなく続けていくことを目指しています。

震災から1年が経ち、これまで多くのアントレプレナー達が復興の一翼を担うべく活動してきました。依然として解決すべき問題は多く残っていますが、ETICは志あるアントレプレナー達を支援することで被災地の復興に寄与すると同時に、自らもその一員としてプロジェクトに取り組み続けて参ります。

2011年3月11日を境に、 東日本の様相は一変しています

甚大な被害: 震度8、マグニチュード9.0の大地震は、三陸沖を中心に南北500kmに渡り津波を引き起こし、死亡者15,848名、行方不明者3,305名(2012年2月10日時点)、直接被害総額20兆円にも及ぶ未曾有の事態となりました。加えて、福島原子力発電所事故は深刻な放射能汚染を生み、住民票に基づくと、福島から3万人超の方が県外に避難しています。

高齢化による深刻な人材不足: 被災前より、若年層を中心に人口の流出が続いていた東北。65歳以上の高齢者比率は、岩手県・宮城県・福島県で約25%、三陸沖では35%にも及びます。被災直後、瓦礫撤去などの復旧活動を牽引した若手を中心としたボランティアは、ピーク時と比べて8分の1以下(2012年1月時点)に減少しており、現地は深刻な人材不足に苦しんでいます。

最大の課題は雇用創造: 最大の課題は、雇用の創造です。震災失業者は10万人にも及びますが、被災者の生活を支えていた雇用保険は2012年1月末から徐々に終了し、国の緊急雇用制度も2015年3月に終わりを迎えます。新たな事業の立ち上げによる雇用の確保が急務であることは明白ですが、沿岸部では津波によって300以上の漁港と22,000隻以上の漁船が破壊されており、主要産業である漁業は壊滅的な打撃を受けています。

また生活面でも、仮設住宅入居後の孤独死や、鬱やアルコール依存の発症、家庭内暴力や自殺などの多くの課題も生まれています。

民間と行政が連携したアプローチが重要: セクターを越えた震災被害により地方税収は1~5割減少する見込みで、社会インフラの構築を行政にのみ委ねるのは困難といえます。

一方で、上記の複合的な課題に対して、セクターを越えた革新的なアプローチが生まれています。あるNPOは、教育委員会と連携して街を挙げて子供の教育環境整備に取り組んでいます。ある企業は、100億円規模の寄付や、本業を通じた物資・情報・サービスの支援、1000人規模の社員ボランティア派遣を行うことを決めました。そして、ある起業家は、数百人の支援者と共に、地域の伴走者として新たなまちづくりに挑んでいます。

震災を機に生まれた豊かな社会関係資本が魅力ある事業の創発を助け、若い力が地域に集う。そうした新たな潮流が、少しずつ生まれつつあります。

震災発生から1年間の取り組み



震災復興リーダー支援プロジェクトは、東北に5年後も10年後も若者たちが集い、チャレンジが生まれるために「挑戦の生態系」の起爆剤となるリーダーを支援・育成すべく活動しています。

これまでの活動は、主に緊急・短期の被災者支援と右腕派遣プロジェクトの2つのフェーズに分けられます。

Phase 1: 緊急・短期の被災者支援 (2011年3月14日～5月1日)

震災発生直後、まず短期の被災者緊急支援として、「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト(つなプロ)」に参画しました。現地でリーダーシップを執って活動する中核メンバーやその右腕メンバーを全国から派遣し、高齢者・障がい者・乳幼児等の震災弱者の支援を中心に取り組みました。また、救援活動に取り組むリーダーの活動に対する助成も行いました。



Phase 2: 右腕派遣プロジェクト (2011年5月～)

その後5月頃から、中長期的な取り組みとして右腕派遣プロジェクトを開始し、現在も取り組んでいます。2012年2月29日現在、右腕へのエントリー者数は171名、そのうち74名を右腕として、合計47プロジェクトに派遣しました。今後は右腕派遣先プロジェクトに対する事業インキュベーションを強化していく予定です。



	Phase 1: 緊急・短期の被災者支援	Phase 2: 右腕派遣プロジェクト
期間	2011年3月14日～5月1日	2011年5月～
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> 「つなプロ」を通じて現地へボランティアを派遣、避難所での課題等を発見し、専門NPO・特殊物資などつなげる活動を実施 「つなプロ」へのリーダー・右腕スタッフ派遣 救援活動に取り組むリーダーへの活動助成 	<ul style="list-style-type: none"> 復興に向けた事業・プロジェクトに取り組むリーダーに対し、右腕人材を派遣 右腕派遣先プロジェクトに対する事業インキュベーション
結果	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア派遣者数:378名 訪問避難所数:443箇所 巡回訪問回数:965回 「つなプロ」へのリーダー派遣数:15名 (以上、2011年5月1日時点)	<ul style="list-style-type: none"> 右腕派遣者数:74名 派遣プロジェクト数:47 右腕へのエントリー者数:171名(累積) (2012年2月29日現在)
	<ul style="list-style-type: none"> ニーズ発見数:505件(うち少数の震災弱者のニーズ:232件) マッチング数:115件 (以上、2011年5月10日時点)	

震災発生からこれまでの主なイベント

- 2011/3/12 震災復興に向けた検討開始
- 2011/3/14 東北地方太平洋沖地震の被災地・被災者への支援に向け「震災復興リーダー支援プロジェクト」発足
- 2011/3/14 全国のNPOによる「被災者をNPOとつなげて支える合同プロジェクト(つなプロ)」への参画決定



- 2011/3/17 先遣隊を宮城県に派遣開始
- 2011/3/18 信頼資本財団との協働で「震災復興リーダー支援基金」を設置
- 2011/3/20 被災地への物資提供開始(以降随時実施)
- 2011/3/23 震災復興に向けた起業家ダイアログ実施
- 2011/3/25 「つなプロ」派遣ボランティア説明会実施(以降随時実施)



- 2011/4/7 震災復興リーダープロジェクト派遣スタッフ募集説明会開催(対象プロジェクト: つなプロ/日本プライマリ・ケア連合学会 東日本大震災支援チーム[PCAT])
- 2011/4/22 「復興へ向けて、未来を創るダイアログ」第1回開催(約50名参加)
- 2011/4/27 地域起業家、農業者、漁業者等と語る「産業復興作戦会議」を仙台および相馬にて開催。東京のベンチャー企業経営者を中心に10名で現地訪問。

- 2011/5/30 第1回右腕スタッフ派遣説明会開催(以後随時)
- 2011/7/6 震災復興リーダー支援プロジェクトのキックオフフォーラム&右腕派遣マッチングフェア開催(143名参加)



- 2011/8/11 勉強会「震災直後から現在、そして今後」開催(以後随時)
- 2011/8/26 右腕派遣先の経営者と東京のベンチャー起業家による戦略会議「被災地のイノベーションに向けてベンチャーは何ができるのか？」開催
- 2011/9/11 震災から半年で右腕派遣人数41名、派遣プロジェクト数21団体に
- 2011/9/22 震災復興に関するメディア向け情報交換会開催
- 2011/10/1 「右腕」マッチングフェア開催(130名参加)
- 2011/10/1 短期プロジェクトスタッフの募集を開始
- 2011/11/20 仙台にて右腕合同研修開催
- 2011/12/17-18 東京のベンチャー起業家が参加しての東北ビジット実施
- 2012/1/19 震災復興リーダー支援プロジェクト活動報告会を開催。メディア関係者等が参加。
- 2012/2/4 右腕派遣マッチングフェア開催(160名参加)
- 2012/2/19 「Entrepreneur Gathering 2012」開催。ニューオーリンズよりFoundation for LouisianaのCEOであるFlozell Daniels, Jr.氏をキーノートスピーカーとして招聘



緊急・短期の被災者支援

震災発生直後の3月14日、本プロジェクトはまず緊急を要する被災者の支援からスタートしました。約1ヶ月半の取り組みの後、中長期的な復興支援活動である右腕派遣プロジェクトに移行しました。

1. 被災者支援プロジェクト「つなプロ」への参画

3/14に宮城・関西・東京の複数団体が連携して始まった被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト(つなプロ※)に幹事団体として参画し、震災弱者支援のためのコーディネート機能の確立に向けて活動をして参りました。

のべ378人のボランティアが3/29-5/1の計33日間に、宮城県内443箇所の避難所を、計965回巡回訪問。「避難所から、これ以上の状況悪化者を出さない」ことをミッションに、避難所での課題・困りごとを「発見」し、専門NPO、特殊物資などと「つなげる」活動を展開しました。

また、3/17-5/1までの期間、現地仙台本部長やエリアマネージャーなどを中心に、東京の社会起業家やETIC、プログラムのOBなど、15名を現地に派遣。彼らの活動を支えるための人件費として、震災復興リーダー支援基金より4,073千円をつなプロに拠出しました。5月以降は、避難所の統合や仮設住宅への移動、更には自宅避難者の増加などを踏まえて、宮城県全域での活動から、市町村単位での地域密着型の活動へと移行しました。



2. 救援活動に取り組むリーダーへの活動助成

震災発生後、いち早く被災地に駆けつけ救援活動を行ったリーダーに対し、活動の支援を行いました。

株式会社ファミリア代表取締役・島田昌幸氏の炊き出しに対し、食料品等の物資支援を実施

震災発生から2日目。マルシェジャパン仙台(直売市場)を運営していた株式会社ファミリア代表取締役・島田昌幸氏(28歳)は、関係のある農家などの協力を得て、有志で炊き出しを敢行。3月末までに2万食以上の炊き出しを実施しました。

ETICは島田氏が大学卒業後に独立した時から連携・協働関係にあり、震災発生から4日目に彼から届いた「とにかく食料を送って欲しい」という応援要請を受け、全国の仲間に呼びかけ、食料品を中心とした物資支援を実施しました(運送協力:株式会社ウインローダー)。

また、仙台市内での物資拠点となる倉庫運営も引き受けるなど、緊急時において、現地でリーダーシップを発揮し続ける島田氏に対して、その活動を支えるための資金面での支援も行いました(震災復興リーダー支援基金より300万円を助成)。



つなプロについて

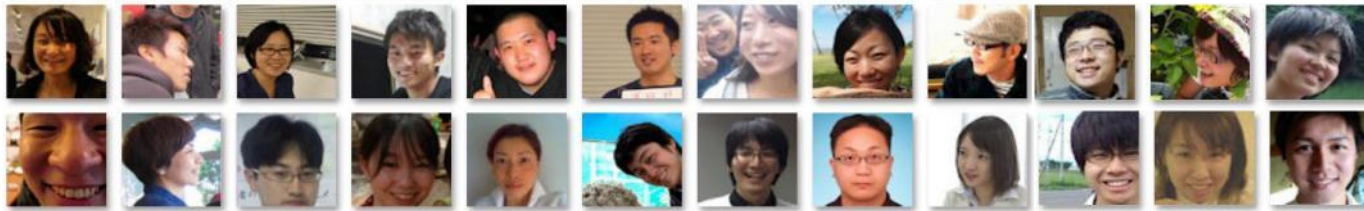
「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト(つなプロ)」は、被災地でこれ以上の死者・状況悪化者を出さないために、被災者の課題や困りごとを発見して、専門性を持つNPO等への支援につなげることをミッションとする合同プロジェクトです。

NPO法人ETICはつなプロに幹事団体および東京事務局としても活動しています。これにより、現地のニーズを的確に踏まえながら本プロジェクトを展開しています。

つなプロによるマッチング事例

	ニーズ	対応
例1	要介護者1名がストマ(人口肛門)を付けている。しかし、震災後、該当者のサイズにあう備品のストックが残りわずかである。	ストマの型番を聞いたのち、CLCにつないでストマの手配と看護師の派遣を依頼。東海大学医学部の医療チーム(石巻赤十字と連携)にも伝え、今後のフォロー体制も確立。
例2	ADHDの3歳女兒がいる。多動で夜叫等があり、周囲の人が困っている。	みやぎ発達障害サポートネットより紹介された発達障害の子ども支援専門家らのグループが避難所を訪問。

右腕派遣プロジェクト



右腕派遣プロジェクトは、震災復興リーダー支援プロジェクトの主力活動です。被災地の復興に向けた事業・プロジェクトに取り組むリーダーのもとに、その「右腕」となる有能かつ意欲ある若手人材を、3年間で200名派遣することを目標としています。

背景: 長期間にわたって事業・プロジェクトにフルコミットできる有能な人材の不足

広域にわたる甚大な被害に対し、社会起業家をはじめとする多くのリーダーたちが、復興活動において重要な役割を担っています。このような状況の中、有能なリーダーのもとには復興に向けた価値ある案件やアイデア、支援・連携の申し出が日々寄せられています。そんな中、数日の短期ボランティアではなく、リーダーの右腕として中長期(3ヶ月～1年程度)参画可能な有能な若手人材へのニーズが高まっています。

しかし、多くのプロジェクトで中核として働く担い手がいないことが課題となっているのが現状です。東北地方は高齢化率がもともと25%強と高く、優秀な若者たちは首都圏の企業に流出する傾向が強かったため、人材難の状況にあります。また、震災の影響により、この流れは加速しています。

目標: 高まるニーズに応えるため、目標を3年間で100名から200名に上方修正

2011年5月から本格スタートした本プロジェクトは、人材不足という現地のニーズにマッチし、受け入れ先から高い評価を頂いています。一方、活動を進めていくなかで、今回の被害が当初の予想以上に甚大であり、より多くの人材が必要であることが、明らかになってきました。

そこで、当初は2014年3月までの3年間で100名と設定していた右腕の派遣目標を、2012年9月、3年間で200名に上方修正しました。

プロジェクトの特徴

- 派遣する右腕は、3ヶ月～1年程度、フルタイムでの勤務が可能な20代・30代の若手で、厳しい環境でも能動的・自律的に活躍できる能力を備えた人材です。
- 派遣先は、期待されるインパクトの大きいプロジェクトを精査し、選定します。また、過去2,500名以上のマッチングを通して獲得したノウハウに基づき、派遣先・右腕双方の希望や能力を十分に踏まえたうえで、高い精度のマッチングを実現しています。
- 右腕の派遣期間中は、震災復興リーダー支援基金より月10万円～15万円程度の活動支援金を支給します。また、派遣にあたっては、事前・事後研修、現地でのサポート(ビジネスマッチング、情報発信)などの各種サポートを提供します。

内閣府からの委託事業のスキームを活用し、短期プロジェクトスタッフも同時派遣

ETICは、内閣府地域社会雇用創造事業の枠組みおよび予算を適用し、2週間～1ヶ月の短期間、人材を派遣する事業にも取り組んでいます。

現地までの往復交通費と、現地宿泊費の実費補助(合わせて上限10万円)が支給されるため、参加者にとって、ほとんど負担なく参画できる仕組みとなっています。

現在まで、産業再生から教育、医療、コミュニティ再生、中間支援まで、多岐に渡る14プロジェクトに対して、45人が参画しています。

具体的な役割としては、専門知識を活かしたコンサルティング、事務スキルを活かした事業の仕組みづくり、仮設住宅のコミュニティ形成の促進など、単純労働とは違う、付加価値の高い業務に右腕と同様に限定しています。

平均年齢は23.6歳、そのうち75%が大学生で、右腕同様に、厳しい環境でも能動的・自律的に活動できる能力を持つ人を中心に選定しました。

人材不足に悩む東北では、専門的なスキルを持つ若手人材が少ないため、短期間の参加でも担える役割が大きいのが実情です。

受入先のリーダーからも「各方面の事業に大きく貢献してくれた」、「派遣者から勉強する所が多かった」、等と高い評価を頂いており、右腕とあわせて事業を創る原動力となっています。



Webサイト「みちのく仕事」: 派遣先プロジェクトの情報やリーダーのインタビュー、説明会等の情報を掲載



マッチングフェア: 数か月に1回、150名程度が参加してのマッチングイベントを開催。説明会・相談会も随時実施。



集合研修の実施: 定期的に集合研修を実施。右腕同士のネットワーク形成の機会にもなっています。

右腕派遣先一覧 -1

*2012年2月29日現在

活動 エリアマップ

* 1 番号は、右図の参加プロジェクトです。

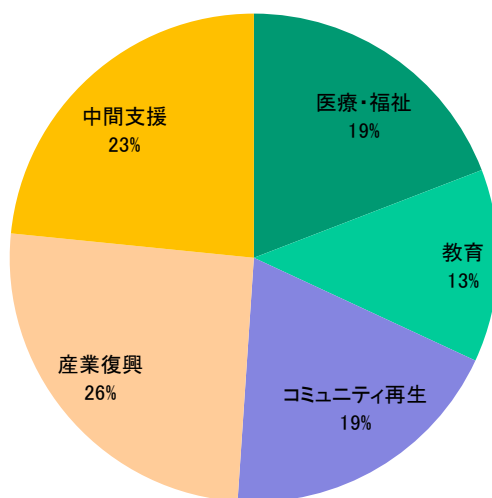


- ぐるぐる応援団
- スペシャル・ニーズを持つ方々の「未来創生」プロジェクト
- つなプロ 牡鹿・雄勝
- つなプロ 気仙沼
- つなプロ 石巻
- つなプロ 南三陸
- つなプロ 多賀城
- 福島県移動保育プロジェクト
- 地域看護・地域福祉 後方支援プロジェクト
- 東日本大震災リハビリネットワーク～face to face～
- 訪問看護ステーション立ち上げプロジェクト
- ドラムカフェジャパン
- [タダゼミ]&[ガチゼミ]
- ほっとスペース

右腕派遣先一覧 -2

- 15. 仮設住宅で生活する子どもたちの教育支援プロジェクト
- 16. 放課後学校「コラボ・スクール」女川町
- 17. 放課後学校「コラボ・スクール」大槌町
- 18. MI-K2(Mission Ishinomaki-K2) ～石巻復興支援プロジェクト～
- 19. 一般財団法人MAKOTO
- 20. 一般社団法人パーソナルサポートセンター
- 21. 仮設住宅・第二のふるさと創出プロジェクト
- 22. 大船渡仮設住宅支援員配置支援プロジェクト
- 23. 大槌町地域支援員配置プロジェクト
- 24. 福島(会津)絆づくり支援センター
- 25. なつかしい未来商店街プロジェクト
- 26. バイオマスエネルギー事業立ち上げプロジェクト
- 27. 東北Rokuプロジェクト
- 28. 岩沼Rokuプロジェクト
- 29. ともづなプロジェクト
- 30. 石巻沿岸地域の未利用資源を活用した産業復興支援プロジェクト(つむぎや)
- 31. 地域資源を活かした釜石復興ツーリズムプロジェクト(ほうらいかん)
- 32. 東の食の会プロジェクト
- 33. 南三陸観光再生プロジェクト
- 34. 南三陸復興アトリエプロジェクト
- 35. Sweet Treat 211(雄勝アカデミー)
- 36. ひたちなか海浜鉄道再生プロジェクト
- 37. 元気になろう福島
- 38. ORIZURUプロジェクト
- 39. RCF災害支援チーム
- 40. せんだい・みやぎNPOセンター 事務局助っ人
- 41. みやぎ連携復興センター
- 42. 岩手県釜石エリア 雇用マッチング支援プロジェクト
- 43. 岩手県釜石エリア 雇用創出プロジェクト
- 44. 地域創造基金みやぎ
- 45. 復興応援団
- 46. 福島大学災害復興研究所
- 47. 亘理町グリーンベルト

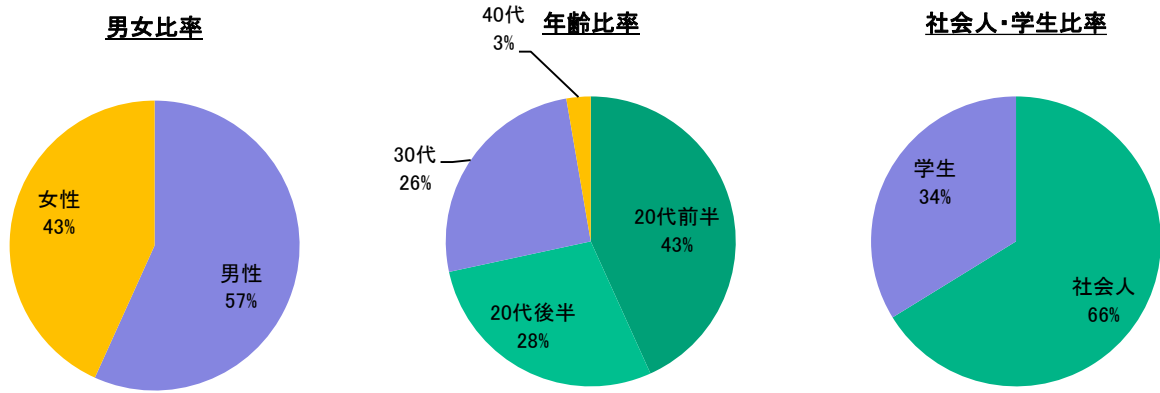
派遣先プロジェクトの分野



これまでの右腕派遣実績

右腕のプロフィール

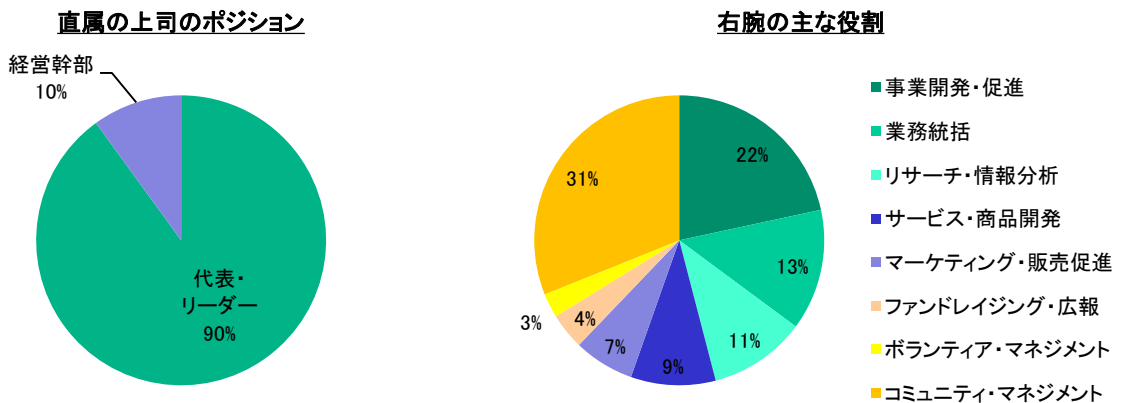
2012年2月29日時点で、右腕への累積エントリー者数は171名、うち74名を選抜し、右腕として現地に派遣しています。



派遣先プロジェクトのプロフィール

派遣先プロジェクト数は、現在右腕募集中のものを含め47です。被災地に派遣された右腕人材のうち、派遣先プロジェクト/団体の直属の上司がそのプロジェクト/団体のリーダーもしくは経営幹部である割合は、100%。つまり、派遣先のプロジェクトにおいて、右腕人材はまさにリーダーの欠かせない補佐役として、プロジェクト全体を動かしていく一翼となっているのです。

その中で、右腕人材が主に担当している分野は様々です。被災地の一刻も早い復興と、復興をサポートする若手人材が必要とされる中、地元で根ざした活動を推進するために必要不可欠な役割を担っています。



右腕インタビュー -1

「地元の方たちが生き生きと働けるための舞台づくり」

—今のお仕事のことを聞かせてください。

南三陸町はタコが名産品で、震災前から地域おこしの一環で「オクトパス君」という置物の合格祈願グッズを作っていました。現在は、それを復興のシンボル「ゆめ多幸鎮オクトパス君」として製造・販売することで被災した方たちの雇用を生みながら、南三陸に住む人たちが夢を追っていきけるような活気のある町を創ることを目指しています。

私は、販路開拓・生産管理・インターネットでのマーケティング・広報などです。TwitterやFacebookなど、ソーシャルメディアを使った広報以外にも、「タコタコ新聞」というアナログな方法を織り交ぜて発信しています。あくまでも、工房で働く住民の皆さんが主役で、その方たちが毎日生き生きと働けるように舞台をつくるのが、私の仕事なのかなと思っています。

—なぜ、このプロジェクトへの参画を決めたのですか。

震災後の短期ボランティア(瓦礫撤去等)を通し、復興には気の遠くなるような時間がかかることを身をもって感じました。一方で、新しい日本を創っていくためのヒントがいま東北に集まっているとも考えました。

なお仕事を選ぶ際は前職での営業の経験を活かして貢献できる分野を選びたいと思っていました。東北の中で背景のある商品売ることに携わりたい、できることならマーケティングや広報など未経験だった分野にもチャレンジしてさらに自分を成長させたいと思う中で、このプロジェクトに出会いました。現場のマネージメントも加わり、やらなくてはいけないことと自分の小ささのギャップに悩むこともありますが、試行錯誤しながら日々挑んでいます。

たとえば、今さまざまな復興支援グッズがあり、飽和気味に感じています。今後は、本当にオリジナリティがないと継続することは難しい。「支援」という購入動機から脱却して、どうすれば買い続けてもらえるようになるか、また顧客とつながっていくことができるかを考えています。先日「タコタコセット」という商品をつくりました。オクトパス君と名産の真ダコをセットにし、海産業にも貢献しようと発案したものです。また付近の神社にも大きなオクトパス君のブロンズ像を奉納しました。単なる商品の販売だけでなく交流人口を増やし地域へ貢献することが重要だと考えています。



村井香月(31歳)

派遣先プロジェクト:
南三陸復興アトリエプロジェクト

—今後のことについて、聞かせてください。

外から支援に来る人の中には、目の前の「見える」成果に集中しがちな人も見受けられます。防災の視点からのハード面での設備はもちろん重要です。ですが同時に、もともと過疎化が進むこの地で震災を機にさらに人口流出が進んでいることも事実です。私も、右腕として自身の成果だけにこだわることなく、10年～30年先を見越したビジョンを、回りで働く人々と共有し町の将来を考える1人でいたいと思っています。

もちろん私ができることは微々たることですが、この姿勢を大切にしたいと思うようになりました。

今後は販売で築いてきたネットワークをもとに、町内外の人たちが交流できる場づくりやオクトパス君のゆるキャラ化など総合的な展開を視野に入れていきます。



プロフィール: 大学卒業後、大手旅行会社を経てフェアトレード会社に勤務。2011年9月1日から宮城県南三陸町入谷地区において復興支援品(オクトパス君)を起点とした雇用創出プロジェクトの右腕として、販売促進・生産管理などプロジェクトの基盤創りに従事。

右腕インタビュー -2

「町の未来に、住民がもっと参加できる仕組みをつくる」



成田好孝(32歳) *写真左

派遣先プロジェクト:
大船渡仮設住宅支援員配置支援プロジェクト

—今どういうことをされているんですか。

大船渡の仮設住宅支援事業の統括マネージャーの補佐役をやっています。統括マネージャーはいろいろ難しい判断をして決めていく必要があるんで、その相談相手であり、時には代理として直接に課題解決に当たります。

課題の共有をして、「僕が統括マネージャーだったら」って視点でソリューションを何パターンかだして、統括マネージャーから個々にフィードバックを貰って。それを繰り返しているうちに、「このソリューションで行こう」と解決策が見えてくる。そういう意味では、ある意味アイデアマンであるかもしれないし、プレスト相手かもしれないし、参謀かもしれないです。解決策を複数のメンバーで協議することの大切さを日々痛感しています。

—現地の統括マネージャーの菊池さんはどんな方ですか。

「みんなをマネジメント」っていう感じではなくて、本当にみんなから信頼されるアニキです。常に1人1人の想いをすごく大事にする人です。そう言ったことから、2人の役割の違いを作れていますね。自分はいろんな打開策・ソリューションを考えることが多く、現地の統括マネージャーがそれぞれの打開策におけるひとりひとりの気持ちに配慮して意見を言ってくれる。

—成田さんご自身がこれまでやられていたお仕事は、どういうお仕事でしたか。

前職はメールマガジンの配信会社で秘書を4年間務め、経営企画や採用に携わっていました。

秘書という名前でしたけど、プロジェクトマネージャー的な社内業務をやっています、1個1個のプロジェクトをまかせてもらってローンチさせて。そこで積み重ねてきたことは今に活かされていると思います

—どうして復興に携わろうと思ったんですか。

3月11日に震災が起きて、仙台や気仙沼や陸前高田に個別に行ったりして、問題意識はそもそも持っていたと思います。問題意識というよりは自分事化かなあ。「何ができるかな」というか。俯瞰した言葉で言えば、東北は日本の最先端の問題がクローズアップされた場所だと思うし、世界がこれから直面していく問題を先取りして社会が浮き上がらせた地域だと思うので。問題の質としては世界の最先端だと思うんですね。そして、その問題を解決してほしいというニーズがあると考えています。

—今後の展望や課題はどう考えていらっしゃると思いますか。

直近の歴史を見れば、「これから町をどうするか」を考えるのは行政というのが当たり前かもしれないですが、「自分の生活や人生は自分でガバナンスする」というのが健全な本来の在り方なのではないかと僕は思っています。自分の町の未来に、住民がもっとダイレクトに参加していい。それをサポートしていくように行政も役割を変えていかなければいけないんじゃないかと思っています。

自分の中で参考事例にしているのは、アメリカにハリケーンカトリーナが来てニューオリンズが

水の中に沈んだとき、「じゃあ次の新しい町をどうする」ということを、住民4000人以上の方々が何十回も議論を交わしながらデザインしていた「America・Speaks」という事例は世界のモデルケースとなっていくと考えています。僕は日本の沿岸部でニーズがあればそれを是非やりたいと思っています。そのような仕組みがあれば、それぞれの地域が独立歩行で、自分達でより良い地域にしていけるんじゃないかと。

—震災から9ヶ月以上たちましたが、今後どういう関わり方が求められていますか。

東京や大阪など被災地ではないところでアイデア化された支援が、常に現地にマッチしているかという点、必ずしもそうではない部分があります。一方で「こういう支援をしてほしい」という声を、沿岸部から発信できる人もとても限られているという現実があります。

今後の課題としては、このような支援の在り方を、外部発から現地発に変えていく必要があると思っています。現地でニーズを把握して、ラフイメージをある程度描いて、支援をしたいという人たちに「こういう形で関わってもらえますか」と相談することで、より現地のニーズに即した外部の関わり方ができていくのだと思っています。

プロフィール:アカシック株式会社代表取締役。学生時代の議員インターンシップの運営・国際交流、投資会社での営業業務、IT企業にて秘書・経営企画業務など幅広い経験を生かして、右腕プロジェクトに参画。大船渡市・大槌町仮設住宅支援事業における統括マネージャーの補佐役。

右腕インタビュー -3

「自分の役割は、事業をやろうとする人を下支えすること」



多田知弥(25歳)

派遣先プロジェクト:
つむぎや(石巻沿岸地域の
未利用資源を活用した産業復興支援)

—今のお仕事は、どんなことをしていますか？

宮城県牡鹿半島東浜地区・牧浜を中心に、漁網を使ったミサンガや鹿の角を用いたアクセサリ・OCICAの制作を通じて、被災された女性たちの仕事づくりとコミュニティづくりを仕事にしています。

具体的には、女性たちとプロダクトデザイナーの双方が「ることができる・作りたい」と思える製品デザインをすり合わせ、制作のためのワークショップを実施、安定的な生産体制の構築や材料の調達、また販売チャネルの開拓をおこなっています。漁網のミサンガに関しては今後、女性たちが集まって作業できる加工場を兼ねた集会場をつくらうとしていて、そのための企画や、建築を進めていく上での論点の洗い出しや設計も最近の仕事です。あとは、支援したいと言って下さる方など外部ステークホルダーとの調整や、予算管理を担当しています。

—最初に、石巻を訪れたきっかけは？

地震後すぐは仕事が忙しく、すぐに東北には行けませんでした。担当していたプロジェクトが一段落した7月、大学時代の先輩だったうちのリーダー(友廣)に連絡して初めて石巻に行ったの

当に誇りを持っているな、というのが伝わってくるんです。猟師さんたちの力強さや集中力もすごい。会社と交渉して休職することになり、9月から参画しています。

—リーダーである友廣さんとの役割分担を教えてください。

彼がおもしろいネタやテーマ、人と出会って「こんなことできそうやん」と言うのを聞いて、やるならこういうことが必要で何がネックかを整理するのが、僕の役割。整理するっていったらおこがましいですけど、二人でディスカッションするための材料を提供する。大学時代にサークルで友廣と一緒にやっていたことも、コンサルタントとしてやっていた仕事も、僕の機能としては変わっていない気がします。今の立場で静かに淡々と、でもきちんとアウトプットを出したい。今はそう思っています。

—最近感じていることや、今後について聞かせてください。

一緒に活動する女性たちが前向きになっていく姿勢や、企画した製品が売れていくことが嬉しい。3年くらいは関わり続けたいと思っています。先のことはわかりませんが、なんともなるんじゃないかな、と。関わる地域のコミュニティを大事にしながら、持続可能な仕組みを創っていきたいです。

が7月19日。一人で千葉から車を運転して。まともに会って話すのは3年ぶりでした。

—一週間滞在したあと、帰りの車の中で上司に退職のメールを書いてしまった。

もともと、誰かの後方支援をするのが好きなんですよね。事業をどうつくっていくかを考えるのが好きで。石巻に行ってみて、友廣に紹介された漁師さんや地元企業の社員さんたちの仕事ぶりを見て、素直に良いと思えたんです。一緒に

に事業をつくっていきたいのは、こういう人たちだよな、という人が、いきなり現れちゃった。彼らの話を聞いていると、自分の仕事や商品に本



プロフィール:経営コンサルティング会社にて2年間、営業戦略の立案・業務改革、新規事業の立上げ支援などに従事。“モノをどうやって売っていくか”というテーマで仕事をしてきた経験を活かし、地域の素材を活かしたアクセサリ制作による被災者の仕事づくりをおこなっている。プロジェクトリーダーの友廣氏は、大学時代の先輩にあたる。

右腕インタビュー -4

「日本に寄付したい」という想いをつなぐ



高山リサ(40歳)

派遣先プロジェクト:
放課後学校「コラボ・スクール」プロジェクト(女川町・大槌町)

「なぜこのプロジェクトに右腕として参加したのか聞かせてください。」

フィリピンのマニラに13年間住み、そのあと去年の年末から半年くらい地元福岡で友人の選挙を手伝っていました。それが一段落して、その時に「こういう右腕の仕事があるけれどどう？」という話を知り合いづてにいただいたんです。

もともと震災に関わる仕事をしたいと思っていたし、カタリバのことも「ワークショップを事業にしている面白い団体だなあ」とずっと知ってはいたので、それらが上手くマッチしたという感じですね。

「マニラに13年いた時は、何をされていたのですか。」

演劇ワークショップという、即興演劇を社会的な問題とも絡めたりする活動をしている人たちがけっこう海外にいて、フィリピンには「フィリピン教育演劇協会(PETA)」というその手の老舗の劇団があるんですけど、そちらにインターンに行き、そのあとは現地で日本のNGOのマニラ駐在員などを経て、国際協力関係でJICA(国際協力機構)や日本大使館でNGOと政府機関の連携に関わったりしていました。あとは、通訳・翻訳、テレビや演劇・映画のコーディネートなどをしていましたね。

「日本で働いてきた他の方たちとは、違う着眼点を持っていらっしゃるそうですね。」

代表の今村さんにも「ぜひ、そういう風に違った視点で気づいたことを教えてください」と言われていて、フィリピンに行く前にもピースポートや通訳の仕事で色々な国に行ったりしていたので、海外に長期間いると客観的に日本が見えてくる、というのは、やっぱりあります。

「NPOカタリバの中において、何か客観的に見えたものや感じたことはありますか。」

本当にイノベティブで素晴らしいことをしている団体だということ。そして、そのすごさに本人達が気づいていない部分があるのかな、ということ。世界に出しても絶対恥ずかしくないぐらいのユニークさだったり、高校生のモチベーションを上げて人生を変えていく作用だったり、カタリバの事業はそういうものを持っていると感じます。海外から資金を集めてくるだけではなく、それをちゃんと伝えたいですね。

「リーダーである今村久美さんは、どんな方ですか。」

ユニークで勢いがあり、突破力がある人だなあ、と思います。私は割と参謀タイプの人間なので、トップに立つと妙に責任を感じて緊張してしまっ。2番手あたりでチームでやるのが好きなんですよね。そういう意味で、この人だったら面白い関わりになりそうだな、いい組み合わせかもしれないな、と思いました。

「実際にやっていて、どんなところにやりがいを感じますか。」

海外でもたくさんの方が今回の日本の震災に心を痛めて、何かしたいと思っていて、それを寄付やチャリティーイベントなどの形で集めるという動きがあります。そして、集めたお金を「さあどうしよう」って思っている方がいっぱいいるんですね。それは、個人から財団・機関まで。規模は小さくても、できれば直接現場で動いている人達に渡したいという方々もいる。支持したいプロジェクトがあれば、どんどん出したいと思っている人は潜在的に多いです。もちろん、震災関連で動いている日本の人達たちもファンは

必要なわけで、そこをうまく繋げられそうな手応えを感じる時は、やりがいがありますね。

「右腕として今後やりたいことはありますか。」

ストレートですけど、出来るだけ多くのお金を集めて、被災地に役立てたいですね。あと、カタリバ本体も非常にユニークな事業をやっていると思うので、そこを上手く海外に向けて発信していけたらなあと思います。

現地の方や社会起業家の方達が、「これは、全く新しいソベーションをするチャンスだ」「これを使って震災前より良い社会を生み出すことが自分たちの義務だと思う、それをしないと亡くなった方達に顔が立てられない」と言っていて。それはすごく印象的でした。なので、そういう心意気でやりたい。

ただ1+1=2というよりも、かけ算だったりするのかなあと。日本が大きく変わっていく転機だと思うので、それに何らかの形で貢献出来ていけたらなあと思います。

プロフィール:ピースポートをはじめ、国際交流、国際協力、舞台芸術の分野で企画運営、通訳・翻訳に携わる。フィリピンのマニラに13年在住し、日本およびフィリピンのNGO、日本大使館、JICAと連携して開発プロジェクトの形成・運営、関係者向けの研修等を実施。経験を生かして現在は海外ファンドレイジングを中心に担当。カタリバ全体の英語での情報発信も行う。

右腕派遣先プロジェクトリーダー 座談会

—まずは簡単にどのようなフィールドで何をしていらっしゃるのか、自己紹介をお願いします。

鹿野: 以前からやっていたまちづくりNPOのつながりから、震災後も本気で町づくりをやらなければと思って、岩手県釜石エリアで雇用マッチング支援プロジェクトに取り組んでいます。地元に残りたい人が残れるような仕組みを作るためにも、収入を得る仕事が必要です。ただ、「雇用」と言うと就業者に限った話になってしまうので、雇用する側の事業再開も含めて支援しないとけません。なので、事業者支援を軸に、就労のマッチングと事業再開のお手伝い、失業者の就労支援を行なっています。

島田: 株式会社ファミリアはもともと一次生産者の所得の向上を目的に立ち上げています。なので、今回の震災は仲間が被災してしまったということで、被災地に仕事を創ることを目的に、ダブルローンを抱えて自ら立ち上がることが難しい方々や、障がい者の方々を雇用しています。

うちはもともと生産・加工・販売の立ち上げのコンサルタントを実施しており、パン屋などの商材を持っていたので、これを活かして宮城県名取市に新しい施設を作っています。自分たちだけでは限界があるので、業種・業態を超えて様々な方面で連携し、農業の六次産業化とレジャー化をテーマに、畑・野菜加工工場・蕎麦屋・パン屋などを並行して立ち上げていく予定です。

菊池: 岩手県大船渡市や大槌町で仮設住宅に地域支援員を配置するコミュニティ支援の事業に取り組んでいます。地域支援員には地元の方を雇用しています。自分の地域を自分でよくすること、そしてそれが仕事になる点が良いなと思っています。団地などコミュニティのなるべく小さな単位で、自分の地域が良くなるために働ける環境があるのはとても大切なことだと思うので。

—現場では、右腕はどのような役割を担っているのですか？

菊池: 今、3名の右腕に来ていただいています。地域支援員として大船渡に89名、大槌町に92名の地元雇用がある中で、その方々が主役となって地域のために働けるよう黒子の役割を担っているのが右腕です。仮設住宅支援員のモデルも根本的には各地域の住民が主役で、そのつなぎ役とお手伝いをするのが支援員なのですが、さらにその支援員のつなぎ役とお手伝いをするのが右腕です。具体的には、北上市、大槌町、大船渡市や関係団体との連絡・調整、研修の企画・関係整備、業務フローのチェック・改善などを担当してもらっています。



自分は同年代と一緒に仕事をしたことがなかったのですが、今の右腕は同年代なので、何でも相談できる非常にいいパートナーです。チームで仕事できるのもすごく面白くて。

—どういった役割分担をしているんですか？

菊池: 今の右腕の3名はみんなばらばらの性格ですが、それぞれのキャラクターを上手に活かして活動してもらっています。例えば、前からいる右腕は総合的なプロマネタイプでいけばがんがん性格なんですね。新しくきた2名の内1名は会社で人材育成をやっていて、人間的な研修に強いんです。非常に性格が細かいのが良い方向に働いていて、こちらが気づかない課題を洗い出してくれます。もう1名は岩手出身で、Uターンして来たんですね。その右腕はSEで、コミュニケーション能力がどどんのびてくれば、地域の役に立つ存在になってくれるので期待しています。右腕達のノウハウを発揮しながら地域の方々があくまで主役で事業が進んでいる現状なので、非常にありがたいと思います。

島田: 今来てもらっている右腕にはまず現場のパン屋の研修から始めて、今は会計・金融機関との調整もやってもらっています。ただ、うちは商業施設を立ち上げるので、気温・天気・来客数・会員数・DM・メルマガの反応などの数字からどうやって消費動向を見破るか、という部分まで担ってほしいと思っています。うちのような中小規模の会社で、こうした事業企画の専任担当者を置けるのはありがたいことですね。また、新しく入った右腕はパティシエをやっていたので、僕が作った企画を実際に商品にしてくれます。これをもとに新しい施設で商品を提供しようと思っています。

—将来的には、こちらが2言ったら10わかるくらいまでに右腕が育っていくといいですね。

鹿野: そこは、右腕に求めたい影響力ですね。言われたことをこなせる人はけっこういます。でも全体として何をやらおうとしているのかという柱を捉えることができれば、それが自分の行動基準となって先を読んで行動できるのですが、これまではそういう人材が必要とされなかった。誰かがワンマンで引っ張っていくのについていけばよかったんですね。でも東北はそういう経験をしなかったからこそ、そこを補う人材がいれば助かります。そういう人たちの仕事のやり方・考え方が基準なんだ、という影響力を実は期待しています。仕事の基準に対する違いがあるので、右腕と地元の方々にとって相互刺激を求めたいですね。



鹿野 順一氏

釜石市で本業の菓子店を営む傍ら、特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンターを設立。中間支援・まちづくりNPOとして活動。震災を機に、被災前のようなつながり、にぎわい・ふれあいを取り戻す支援活動を目的に「いわて連携復興センター」を設立し、岩手県内全域・全国のNPOと連携して活動。

右腕派遣先プロジェクトリーダー 座談会

—外から入っていくことの意味ですね。そのあたりはどう考えていらっしゃるでしょうか？

菊池: プロジェクトをしっかりマネジメントしていくスキルを持っている人は地元が少ないので、そこを外のリソースを上手く使って解決していくのはいいなと思っています。右腕の仕事は、大局的に先を見ながら仕組化することだと思うんですね。右腕がいなかったら、現場の目の前の仕事に追われてしまうので、こういう部分を担う人材に予算がつくのは大切なことだと思います。もちろん根本にあるのは、右腕がいかにプロジェクトを自分のものだと思って主体的に関われるかですが、その点は前向きになってくれているので、もっと右腕の能力を活かすための役割調整・インプットは受入側の役割だと思います。地元は右腕の力を求めているので、地域の状況・現場での体験など右腕が輝ける環境を作って、上手く回ってほしいかな、と。

島田: 外から右腕として入って必要とされるのは、仕事に対する慣れとスキル・仕事の型だと思います。例えば東京の大企業で仕事をすれば、仕事の型ができる。決められたことに対してPDCAが回る仕組みをきちんと作れる。これは地域の中小企業には少ないと思います。

これをしたら次に何をやる、という総務のスペシャリストのような、その道でのプロが被災地には必要かと思えます。

そういう意味では、「やりたくて来ました」だけでは右腕とは言えないと思うんですね。「できること」が仕事。「私は今までこれをやってきたから、こういうことができる、こういう貢献がしたい」「今までやってきた経験で、これは責任を持ってやれます」と言える方はとてもありがたいです。



菊池 広人氏

いわてNPO-NETサポートの事務局長として、北上市における市民活動・協働の推進と地域づくりのサポート、政策形成過程における市民参画ワークショップの実施等に従事。震災後、いわて連携復興センターの立ち上げ、きたかみ復興支援協働体の立ち上げを行い、双方の事務局を担当。

—現在右腕の最終面接中の鹿野さんは、このあたりはどのようにお考えですか？

鹿野: 僕はその点を、初対面の右腕候補者に対しても突っ込んで言っちゃいます。受け入れる経営側としては、今の自分たちに足りない役割を冷静に判断した上で、本当にその役割を担えるかという点も冷静に判断したい。なので、本気なのかという覚悟は聞きたいですね。

というのは、そういう厳しさが今まで地元には決定的に欠けていたんですよ。組織の中で仕事する厳しさの経験がなかった。自分たちがやれる範囲で、繋がりや融通が効くところでしか仕事してきていなかったんです。そういう状況に外から風を入れることが、「これが仕事のスタンダードではなくて本当はこうなんだよ」という基準に変えていく手段にしたいなと思います。自分たちだけで変えていくのは難しいので、ここが基準だというのが、地元の同世代に意識させられる存在を、右腕には期待しています。

菊池: せっかく右腕の方が来てくれているのだから、応募する人の視点で言えば、右腕を経てどんなスキルが身に付けられてどんな自己実現ができるのかという点をしっかり考えたいと思います。「あなたにはこういう背景やビジョンがあるのであれば、こういう仕事をしてほしい」というように。例えば、今右腕で来ているうちの1名はある程度個人事業主として食べていきたいとのことなので、プロジェクト全体のプロマネや、嫌なこと・苦手なことをどうプロセスデザインしていくかなどの仕事は彼にやってもらいたいと思っています。また、別の岩手出身でUターンしてきた右腕はその後も地元に戻ってきたいとのことなので、地域の中で必要なコミュニティの背景のインプットやコミュニケーション能力を伸ばしていきたいです。せっかく彼らが来て岩手のために仕事をしてもらっているのに、彼らの将来から見てもいい時間になってほしいなと思います。

期限付きで入ってきてくれた人に対して、次につながる経験を提供するのは受入側としてのこちらの責任だと思っています。

—そこまで考えていただけると、こちらとしても非常に安心して右腕を派遣できますね。既存オペレーションの足としての右腕、というのは我々がイメージしている派遣ではないので・

島田: 僕もビジョンはしっかり聞きます。キャリアをどうやって積み上げて、僕らはそこにどう近づけて僕らの仕事とどうリンクして繋げていくのか、というのは大事だと思います。例えば、今いる右腕の1人は将来自分の店を持ちたいから、今やっている仕事とつながると思うし。僕らの駒というより、彼らの人生の中でこの1~2年をどうするかだと思います。



島田 昌幸氏

株式会社ファミリア代表取締役。2009年より仙台放送・地元農家と連携したマルシェジャポン仙台的の運営に関わる。震災発生2日目から炊き出しプロジェクトを展開。現在、復興にむけて新たな雇用と東北の再生モデルの創出を目指した農林漁業6次産業化モデルファームを展開。

だから、人足はアルバイトでいいんですね。右腕に期待するという以上に、受入側が右腕のキャリア・将来を考えた上で、必要な厳しさは必要なんです。例えば、別の右腕が最初に提出した報告書を厳しくフィードバックしたら、再提出した報告書は素晴らしいものでした。彼にとってお金が取れる仕事になったんですね。そうなれるよう、僕が責任を持って本気で教えなきゃいけないという想いがあります。

ちなみに、その報告書のおかげで、我々が想定した商品・サービスの展開と地域住民の想定が違っているとわかり、サービスを変えることになったんです。次のマーケティングになったんですね。

菊池: 右腕に人足を依存してしまうと、事業が持続的でなくなると思います。地域の人の方がより精度の高い仕事をするために仕組みが必要で、それを支えるのが外部から入った右腕。これは平時でも必要な仕組みだと思います。

—最後に、右腕派遣の課題、もっとこうしたいのではないかと、ということがあれば教えてください。

島田: 業界によってどの時期にどのくらいの右腕が必要かは異なってくると思うので、そこを今後調整できるといいと思います。また、うちの業界に関して言うと、色々な分野の人がほしいです。うちは一次産業の現場を活用した観光という要素もあるので、観光の軸で言うと、色々な分野の尖った人がいたらいいなと思います。

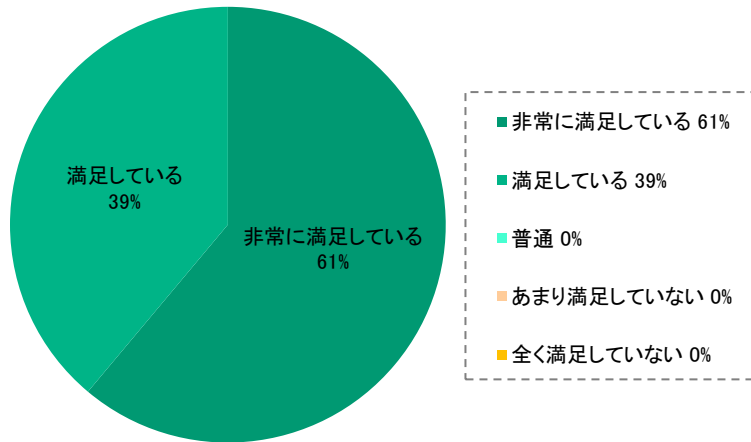
鹿野: 時期によって必要とされるスキルは変わるので、派遣人数の全体的なスキームは毎年均等な人数でいいと思います。ただその分、スケジュール感を持って「今必要なものは何か」という視点を持てるといいですね。

右腕派遣先プロジェクトリーダー アンケート -1

派遣先プロジェクトにおける右腕の貢献度

派遣先プロジェクトにおいて右腕が具体的にどのような貢献をしているのかについて、2ヶ月以上右腕を受けて入れている派遣先プロジェクトリーダー18名にアンケートに答えていただきました。

1. 派遣された右腕の働きに対する満足度とその理由 (n=18、右腕派遣から2か月以上が経過した団体が対象)



派遣先プロジェクトリーダーの右腕への満足度は全体的に非常に高く、右腕が現地に役立つ形で活躍できていることが見て取れます。

プロジェクトを始めた当初は、右腕と派遣先プロジェクトのミスマッチの懸念等もありましたが、結果的に5段階評価で4以上の評価をいただくことができました。

今後も引き続き、派遣先・右腕双方にとってより満足度の高いマッチングをできるよう努めてまいります。

リーダーからの声(抜粋)

「今の地元、自分たちのコネクションだけでは得られにくい能力として、ITやSNS使用のスキル、外部来訪者としての目線、都市圏の経済の動きの感覚、英語などの語学力などの面で貢献してくれています。」

「外部専門家と連携しての商品開発、商品の製造フローの確立、生産数量管理及び品質管理を担当してくれています。また、外部への発信、ファンドレイズ等でも貢献してくれています。基礎的なビジネススキル以外には、物怖じしない好奇心と積極的な学習能力、コミュニケーション能力でプロジェクトに貢献してくれたと思います。」

「担当プロジェクトにおける団体のビジョンと戦略を十二分に理解し、市・市の社会福祉協議会・団地住民など多種多様なステークホルダーとの絶妙な関係構築(相手に依存させず、期待させ過ぎず、信頼され続ける)にそのコミュニケーション能力を遺憾なく発揮してくれています。リーダーである私が強みとしている営業力や提案力などが活きるのは、右腕の不断の努力を基盤とできるからです。」

「共に支え合う仲間として、自分の性格に足りない部分を補い合える素晴らしい人格の二人が来てくれている。」

「学校や自治体からの要望に迅速に対応する他、毎週5拠点・50人程度のボランティア管理、宿泊・物資輸送管理をするなど業務過多のためスタッフ一同過労状態の中ですが、文句ひとつ言わず良く頑張っています。」

「効率的な事業戦略を考えながら取り組むようになりました。課題であった販売促進力が高まり、販売手法が広まりました。また、右腕の人脈により、新たなネットワークと業務が生まれています。右腕は工房や地域の人と馴染んでおり、今となっては欠かせない存在となっています。」

「弊団体は震災後に新規事業として立ち上がったのだが、事務局運営、プロジェクト運営ともに人材不足で苦しい状態が続いていた。そんな中2名の右腕を迎え、その苦しい状態が明らかに改善した。」

「有能かつモチベーションが高く、自主性もあるため、即戦力として働いてもらっている。」

「プロジェクトの拡大に際し、既存社員だけでは対応しきれない分野のサポートメンバーとして、個々の得意分野を生かして機能してくれている。」

「その謙虚な姿勢は、若手スタッフの良き模範ともなっており、弊団体にも欠かせない存在となって頂いています。」

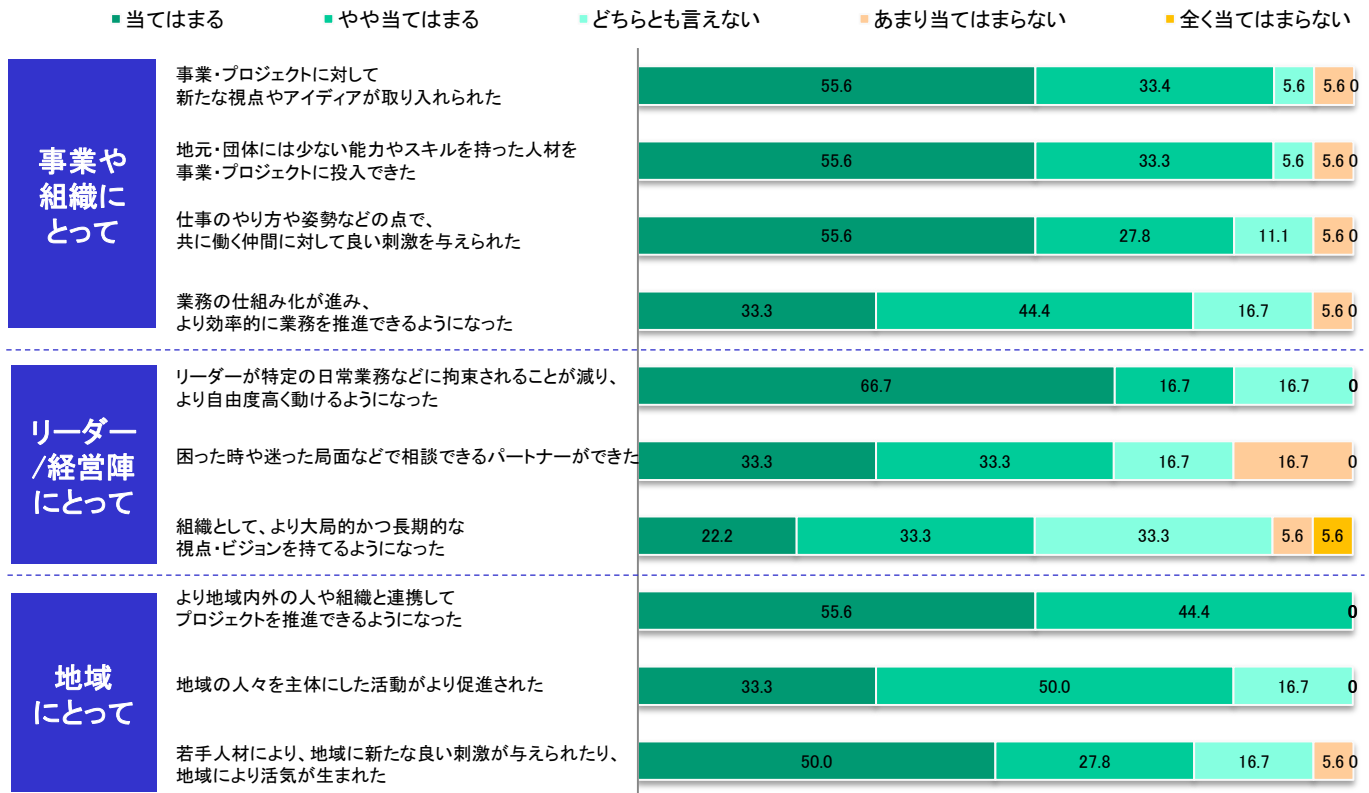
「震災後の混乱の中、常に修正を加えながら行う仕事に対して適応力が高く、非常に我慢強く臨機応変に取り組んでくれています。また、事務局運営及びプロジェクト・マネジメントを円滑に進めるための基本+αのビジネススキルが備わっているため、ある程度仕事を任せられます。」

「先がなく、答えがない現地で、相談しながら、ぶつかりあいながら一緒に進める人がいることは何よりの助けになりました。」

「前職の金融機関での実務経験による専門性が、そのまま新規事業の立ち上げに後継されている。」

右腕派遣先プロジェクトリーダー アンケート -2

2. 事業や地域にとって、右腕受入によって向上した点や右腕が入った意義 (n=18, [%])



3. 今後、右腕派遣プロジェクトに対して期待すること

「情報交換、協働事業、スキル共有などの右腕間の連携と、右腕及び他スタッフに対するモチベーション強化をより図ってほしいです。」

「即戦力の人材、特に事業立案・立ち上げやファンドレイズの一翼を担えるような人材のマッチングを期待しています。」

「今後は単に個別の団体へ人材を派遣するだけでなく、東北に社会起業家の生態系をつくるという絵の中にこの右腕派遣プロジェクトが位置づけられるべきなのではないかと考えています。一つの大きなビジョンに向かって支援組織と現場の団体が協働していくことが必要だと思いますし、弊社もそこに微力ながら貢献させていただければと思います。」

「できたての小さなNPOでは、課題分析、企画、提案、調整、資金調達、会計管理、プロジェクト・マネジメント、法務・リスク管理など、あらゆる方面のエッセンスを抑えながらマルチタスクをスピーディにこなす必要があります。そのため、現場の仕事を中長期で担当する右腕の他、今後は短期間でも戦略コンサルタントのような人材を紹介していただきたいです。」

「今後は必要人的資源を企業側からのインターンとして確保するなど、参加者個人にあまりリスクをかけない形で実施できれば、よりこの仕組みは進むと思います。」

2012年度以降の活動方針 ～中長期の復興に向けて

起業家精神あふれる自立のスパイラルに向けて、現地リーダーとともに、「各被災地の住民主体の挑戦を支えるハブ機能の創出」と「モデル事業」へ資源を集中します。

未曾有の大災害を受け、私たちは緊急支援として、3月14日より避難所支援や物資供給支援に取り組んできました。被災地に足を運び、支援活動と並行して現地ニーズ把握を進める中で見てきたのは、各地で民間による復旧・復興へのプロジェクトが立ち上がる一方で、圧倒的な人材不足のため、リーダーが疲弊し、プロジェクトを軌道に乗せることが困難な状況です。そこで、2011年5月に「右腕派遣事業」を開始し、これまでに74名（一部派遣前含む）の派遣を行ってきました。福祉、医療、教育、仮設住宅支援などのコミュニティ支援プロジェクトや、農業・漁業、観光などの産業復興プロジェクトに、ビジネス経験ある優秀な若者たちが参画し、まさにリーダーの右腕として活躍しています。

この右腕派遣事業を通じて、岩手県・宮城県・福島県の被災現場を動き回り、復興に携わる300名以上の方々と話し合いを進める中で、わかってきたことがあります。それは、甚大な被害を受けた各被災地が行政支援を必要とする一方で、依存スパイラルを生み出しつつあるということです。

最大210日間に延長された失業保険給付は、2012年1月末から段階的に終了を迎えています。一方で、沿岸部の基幹産業であり、雇用の最大の受け皿でもある水産業の復旧には、まだ2年から3年かかるという声が大勢です。仕事を失い、生きがいを失った方々（特に高齢者の方々は）、仮設住宅で閉じこもりがちになることも多く、生活保護世帯の増加が懸念されています。さらには、復興を担う若手世代などを中心に、被害の大きかった沿岸部から内陸部や県外への人口流出が進んでいます。失業保険給付の終了とともに人口流出が加速することで、高齢化がますます進むことへの懸念の声もあがっています。

このような負の連鎖を食い止め、起業家精神溢れる自立のスパイラルに変えていくことが、大震災から1年を経過した今、必要なことだと感じています。その流れを創るために、私たちにできることは何か。二つの方向性を考えています。

1. 被災地の住民が主体となった挑戦を支えるハブ機能を創出

様々な課題や葛藤を抱える一方で、多くの人が可能性を見出し、歩み始めています。地域産業の中核をなす農業や水産加工業などの事業者やNPOのリーダーに加え、独立独歩で生計をなしてきた漁師、主婦や高齢者、そして地元出身の若者たちなど、その動きは世代や立場を超えて広がっています。こうした地域の人たちをエンパワーし、主体的なまちづくり、復興を支えていくためには、彼らの挑戦を支えるハブとなる存在が地域ごとに必要とされています。また、それは復興へ向けて、東京や全国、世界のリソースを繋げるハブでもあります。

そして、右腕派遣先のリーダーや右腕たちは、少なからずそのハブとして進化しうる可能性をもった存在でもあり、かつ既にそのような役割を担う団体が始まっています。今回右腕として入り込んだビジネスパーソンたちは、これまで東北に不足しがちな機能（プロジェクトマネジメント、マーケティング、コーディネート等）を提供しています。情熱ある若者が奮闘することは、被災地をエンパワーすると同時に、被災と行政の拙策等でばらばらになりかけていた地域を繋ぐ求心力にもなりつつあります。

そこで、ETICでは右腕派遣事業の次のステップとして、被災した各コミュニティ（市町村単位）に、こうしたハブの存在を生み出していくことを促進していきます。具体的には、ハブ機能となりうる右腕派遣先に対して、各企業や行政、そして全国や世界のリソースを繋げていき、復興の流れを加速させていきます。また、各コミュニティのコーディネーター役となる人材を市町村単位に派遣することで、これら外部からのリソースと、地域内から立ち上がる住民主体の挑戦とを効果的につなげていくことを支えていきます。そうした地域に寄り添う民間の機能がつくられることで、地域住民の主体性に基づいた、適切な復興の流れが生み出されていくことを目指します。

右腕派遣先のリーダーや右腕を
起点とした、起業家精神あふれる
自立のスパイラルを創出



2. 産業やコミュニティの復興モデルとなりうるプロジェクトの戦略的推進

そしてもう一つは、各被災地がベンチマークできる、復興モデルコミュニティ、モデル事業を生み出すことに貢献します。ここにも若者たちのチャレンジスピリット、起業家精神、企業のリソースなどが必要となります。

今、被災地では未来を導く光となるような、目指すべきものが求められています。いかにインフラ等の復旧を果たしても、一度壊れたサプライチェーンを元の状態に戻すことは困難であり、産業規模の縮小は避けられない状況にあります。とはいえ、被災地には今、現状打破に向けて踏み出すエネルギーが不足しています。ここには起業家精神とイノベーションが必要で、若者たちのアイデア、チャレンジにもとづいて、イノベティブな、新しい復興のモデルプロジェクトを、各地域の特色を活かしながら生み出していくことに、私たちが深く関わっていきたくて考えています。

これまで右腕派遣事業を通じて、新たな東北、そして日本の姿を思い描き、ビジョンと戦略を持った素晴らしいリーダーの方々と出会ってきました。特に、農業・漁業など一次産業の六次産業化や、自然再生エネルギー、高齢化を支える新たな地域医療・福祉モデル、住民自治による課題解決型コミュニティづくりなど、持続可能な地域社会を創りあげていくための事業は、東北のみならず、日本の各地域にとっても重要な挑戦です。

ETICとしては、これまで通り右腕人材を送り込みながら、機動力を持って事業創出を支えるベンチャー企業や、大企業そして政府等のリソースも投入していきます。そうした生まれたモデルは、各地域に張り巡らされたハブ機能によって、適切な場所に適切なタイミングで共有されていくはずで

2012年度以降の取り組み

ETICとしては、「各地域におけるハブ機能の確立」と、「イノベティブな復興プロジェクト創出」の二つの軸をもって、依存スパイラルからイノベーションスパイラル、地域の主体によって復興が成し遂げられるべく、その流れを生み出す基盤をつくっていきたくと考えています。さらにハブを軸として、さまざまな人や資源が繋がるプラットフォームも同時に整備していきます。

以上の基本方針に基づき、各関係機関と連携しながら、以下の事業を展開して参ります。

1. 右腕派遣事業

3年間で200名の派遣という目標（現地ニーズの高さを受けて100名から上方修正）に基づき、引き続き、復興に必要なスキル・経験を持った、若手人材の派遣を行います。2012年度は合計70名の派遣を目指します（2011年度：92名）。

特に、「各地域におけるハブ機能の確立」と「イノベティブな復興プロジェクト創出」を推進するために、強化地域・事業を設定し、それらを担うコーディネーター型人材や起業家型人材の派遣を強化します。より高度な専門性や起業家精神を持った人材を発掘・派遣するために、既存の右腕派遣から発展した枠組み（年間400万円の活動支援金など）を開発します。

また、これまで高い放射線量がネックとなり派遣を見送ってきた福島県内のプロジェクトに対して、福島大学災害復興研究所、一般社団法人ふくしま連携復興センターとの協働によりガイドラインを設定し、2012年4月以降、右腕派遣を開始します。

2. 右腕派遣先への経営資源コーディネート事業

2011年度より実験的に取り組んできた、ベンチャー経営者らによる東北ビジット・事業戦略会議を定期的に行い、ベンチャー企業の持つ商品開発・事業開発力を東北と結び付け、「イノベティブな復興プロジェクト創出」を後押ししていきます（2011年度は2回実施し、計9名が参加）。

全国各地の地域活性化・人材育成に取り組む団体と連携し、東北の各プロジェクトに全国の大学生を1か月程度の短期プロジェクトスタッフとして派遣していきます。彼らが繋ぎ役となり、東北と全国各地の事業者との連携を生み出します。2012年度は内閣府復興支援型地域社会雇用創造事業の一環として、300名の派遣を目指します。

社会的な信用を始め、優秀な人材、ノウハウ、購買力などの経営資源を持つ大手企業と連携し、被災地での住民主体の挑戦を後押ししていきます。具体的には、専門性を持つプロフェッショナル・ボランティアの派遣、被災地で生まれた商品・サービスの広報・販売促進支援、さらには各社の独自性を活かした中長期的な復興支援活動の研究開発に取り組めます。2012年度は10社との連携を目指します。

「各地域におけるハブ機能の確立」を推進していくことで、被災地のニーズとこれらの経営資源を有機的にマッチングさせていきます。また、これらのニーズや経営資源の情報を集約し可視化することで、さまざまな人や資源の自律的なマッチングが加速していくためのプラットフォーム機能の構築にも取り組みます。

3. スタートアップ支援事業

新たな東北のリーダーを発掘・育成するために、2012年度よりスタートアップ支援に着手します。被災地内からの新規創業はもちろん、被災地外から東北で新規創業を目指す若者の誘致も行います。右腕として参画した若者たちにとっての、次の挑戦の選択肢となることも目指します。

実施にあたっては、各地域のハブとなるリーダーと連携。地域の課題やニーズ、地域資源と結びついた新規創業を生み出していくことで、地域の復興に向けた担い手を豊かにしていきます。

本事業は、内閣府被災地型地域社会雇用創造事業の一環として実施するほか、民間の助成金・寄付金によって実施致します。

実施体制および予算計画

実施体制

左記の事業を推進していくために、被災地で案件発掘・リソースコーディネートに取り組むコーディネーターを、現状の4名体制から7～8名体制に増員するほか、事務局体制も強化して参ります。

また、より多くの組織との連携を進めていくにあたり、ガバナンス体制の強化を図るために、外部有識者らによる幹事会を構成し、プロジェクトの透明性を高めていきます。

2012年度予算案

* 内閣府の委託事業を除いた自主事業の予算となります。

支出の部：2億8235万円

現地への直接補助（活動支援金・起業支援金）	1億7635万円	62.4%
事業費（旅費交通費・講師謝金・会場費・印刷費・委託費等）	3760万円	13.3%
人件費	4200万円	14.9%
管理費	2640万円	9.4%

収入の部：2億8235万円

前年度繰越金	8900万円	-
新規寄付・協賛金等	1億9335万円	-

協力企業・団体および連携団体

本プロジェクトは、国内外の企業や財団、団体、そして多くの個人の皆様に、多大なるご支援をいただいております。皆さまのご支援に厚く御礼申し上げます。本プロジェクトにご寄付いただいた企業・団体の一部をご紹介します。(2012年2月29日時点)

協力企業・団体：海外

(アルファベット順)

 Corning Incorporated Foundation

 Give2Asia

 GlobalGiving

 Japan Society

 Jolkona Foundation

 Miner Foundation

 Salesforce Foundation

 Social Venture Partners International


協力企業・団体：日本国内


(五十音順)

 NPO法人Eyes

 SVP東京


 花王株式会社

 在日米国商工会議所

 株式会社サイバーエージェント・ベンチャーズ


 株式会社サンブリッジ

 株式会社ジークレスト


 株式会社CKプランニング (キクタス)

 日本GE株式会社

 NEC (日本電気株式会社)

 株式会社ビジネスバンク


広島若手経営者の会

 株式会社 フィッツコーポレーション

 FIT for charity

復興支援プロジェクト
「人生を変える一冊」LIVE

 株式会社ベネッセコーポレーション

 株式会社ワーク・ライブバランス

個人寄付者の皆さま

信託資本財団およびETICの口座にご寄付いただいた個人の方のお名前を一部ご紹介いたします。下記以外にも多くの方々から、ご寄付をいただき、活動をしています。

皆さまのご支援に厚く御礼申し上げます。

石塚 文子／上田 祐司／上野 由布子
植村 百合香／江崎 礼子／岡本 浩一郎
小山 千鶴子／笠原 健治／鏑木 孝昭
川上 邦彦／桜井 民雄／鈴木 克洋
西村 幸子／塙 創平／伴 昭三／
松信 章子／三澤 博士／宮野 愛希琴／
森本 佳子／安淵 聖司／八納 啓造／
山田 進太郎 他、多数

(2012年2月29日時点、五十音順・敬称略)

連携団体



■つなプロ

ETICはつなプロに幹事団体および東京事務局として活動し、現地のニーズを的確に踏まえながら本プロジェクトを展開してきました。



■株式会社シゴトヒト

Webサイト「みちのく仕事」を、「東京仕事百貨」を運営する株式会社シゴトヒトと共同で運営しています。



■公益財団法人信託資本財団

本プロジェクトの推進にあたり、信託資本財団と共同で「震災復興リーダー支援基金」を立ち上げ、寄付を募集しています。

ご寄付・ご支援のお願い / 財務報告

「5年後も10年後も若者たちが集い、起業家精神溢れる東北へ」

大震災から1年間、多くの若者たちが東北に足を運び、その甚大な被害を前に立ち竦み、一人の人間にできることの小ささに悩み、それでも自分にできることをと、行動をしてきました。時間の経過とともに被災地は落ち着きを取り戻し、それに伴い、ボランティアの数も激減してきました。一方で、地域の方々を中心に、新たな挑戦の火種が燃り始めています。その火種をいかに育てていけるか、これからの数年間の歩みが問われています。

もともと高齢化率も高く、人口流出も進み、医療の問題、衰退する一次産業の問題など、東北(特に沿岸部)は多くの課題を抱えていました。それが大震災により、更に加速しました。しかしその姿は、多くの有識者が指摘する通り、日本の各地域の未来の縮図でもあります。だからこそ、これまでの成長一辺倒や都市偏重型ではない、新たな国のあり方が問われており、東北の復興とは、新しい日本を創る挑戦だと言えます。そして東北には、その土台となる歴史や文化、地域コミュニティ、豊かな自然が残っており、震災前から持続可能な地域づくりに向けた官民協働による新たな試みも始まっていました。

その歩みに、どれだけの若者たちがともに挑んでいけるか。ETICが果たすべき役割は、ここにあると考えています。モデルとなる「イノベティブな復興プロジェクト」の姿が、若者たちの挑戦意欲を喚起し、そして各地に生まれた「ハブ」機能が、若者たちの起業家精神と東北の歴史や文化、そして地域課題や地域資源とを結びつけ、東北に根差したイノベーションを生み出していきます。

5年後も10年後も若者たちが集い、起業家精神溢れる東北へ。まだまだ道のりは遠いですが、よいかたちで復興が進むため、また主体的で尊厳ある東北の復興が進むために、2012年度も復興に挑むリーダーたちとともに歩み、未来に拓かれたプロジェクトに育てて参ります。

ご寄付・ご支援のお願い

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在までに総額およそ1億5000万円のご寄付のほか、民間企業や国内外の財団から引き続き支援に関する照会をいただいております。

しかしながら、右腕人材の派遣をはじめとして、現地で復興の取り組む人々からの支援のニーズは予想以上に高く、右腕派遣の目標を「50件のプロジェクトに200名」と当初の倍に設定しなおしたのをはじめ、各プロジェクトへのハンズオン支援の充実、新たなプロジェクトのインキュベーションやスタートアップ支援など、震災復興リーダー支援プロジェクトの全体像の再構築に取り組んでいるところで。

目標の変更に伴い、総予算額も3年間で6億円以上の規模となる見込みであり、引き続き、必要な資金の調達を進めてまいります。

皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」への引き続きのお力添えをはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますようお願い申し上げます。

<寄付の受付>

信頼資本財団「震災復興リーダー基金」

<http://www.shinrai.or.jp/fukkou-shien/etic2/>

※公益財団法人である信頼資本財団は、特定公益増進法人に該当するため、寄付者の税は確定申告をすることによって寄付金控除の優遇措置を受けることができます。

GlobalGiving: Sponsor Fellows For Tohoku And Japan's Recovery

<http://www.globalgiving.org/projects/sponsor-fellows-for-tohoku-and-japans-recovery/>

※米国在住の方は、GlobalGivingから寄付していただくと、税控除を受けることができます。

2012年1月末時点での収支

収入(寄付金)	¥123,444,939
---------	--------------

※上記は2012年1月末時点で受領済みの金額であり、1月末時点で金額が決定した寄付金の総額は、約1億5000万円となります。

Phase 1: 緊急・短期の被災者支援	活動支援金(つなプロ関連)	¥9,438,000
	活動支援金(助成金)	¥3,000,000
	事業費	¥866,604
	人件費	¥598,724
	一般管理費	¥1,390,333
	小計	¥15,293,661
Phase 2: 右腕派遣プロジェクト	活動支援金	¥19,239,100
	事業費(部門事業費)	¥4,111,918
	人件費	¥4,815,230
	一般管理費	¥2,816,625
	小計	¥30,982,873
支出合計		¥46,276,534

※上記に加え、現在派遣中の右腕の期間終了までの活動支援金で約3000万円の支出が決定しています。

ETIC. について

団体名称: 特定非営利活動法人エティック
<http://www.etic.or.jp/>

設立: 1993年

法人化: 2000年3月

役員: 代表理事 宮城治男
理事 孫泰蔵(MOVIDAJAPAN株式会社 代表取締役CEO)
理事 佐藤真久(東京都市大学 環境情報学部 准教授)
監事 松田修一(早稲田大学大学院 商学研究科 教授)

スタッフ: 60名(うち専従32名)

所在地: 〒150-0041 渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

連絡先: 電話番号 03-5784-2115
FAX番号 03-5784-2116

ETIC.が本プロジェクトを推進する背景

1. 「右腕人材」と「プロジェクト」のマッチングに関するノウハウと国内随一の実績

ベンチャー企業やNPOでの長期実践型インターンシッププログラムを通し、過去14年間で2,500名の右腕人材とプロジェクトのマッチングを行ってきた実績(約550件に派遣)。

単に人を集めてマッチングするのではなく、各プロセスに相応のコストを割いて、丁寧にコーディネートすることで成果を生み出すモデル・ノウハウは、経済産業省や内閣府などからも高い評価(経済産業大臣賞受賞等)を受け、国の人材育成政策にも影響を与えている。

2. 日本を代表する若手社会起業家のインキュベーター組織

過去10年間で150名以上の社会起業家のハンズオン支援を実施。支援先起業家の事業継続率は95%以上。政策に影響を与える社会起業家も多数輩出。日本における社会起業家支援の草分け的存在。

社会起業家の育成・支援に対して、2010年度は215名の経営者・有識者らがメンターとして参画するなど、社会起業家支援の豊かな生態系を育ててきている。

3. 全国に広がるETIC.ネットワーク

2004年にスタートした長期実践型インターンシッププログラムの地域展開の取り組みは、現在30地域にまで広がっている。各地域のパートナー団体が連携する各地の有力中小・中堅企業は1000社以上にのぼり、連携大学は30大学を超える。

連絡先・お問い合わせ先

NPO法人ETIC.内 震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局 (担当:山内・辰巳)

mail : fukkou@etic.or.jp

Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/>